

保育におけるわらべうたあそびの有用性

坂本久美子

The Usefulness of Children's Songs in Childcare

Kumiko SAKAMOTO

はじめに

わらべうたは、あそぶ動作に伴う唱えや歌として、平易な言葉や日本語の高低アクセントに合った自然なリズムや節を子ども自身が創り出し、これまで長い時をかけて伝承され、その時代の子ども達によってアップデートされてきた文化財ともいえるものである。社会の変化と共に、子ども達の遊びに必要な時間や空間・仲間の「三つの間」が失われ、わらべうたもまた、伝承が難しい状況にある。このような状況の中、幼稚園や保育園が家庭や社会に替わって「三つの間」を補完し、わらべうたを伝える場としての可能性を持っていることは、文化を伝承するうえでも、役割が大きいといえよう。それを可能にしているのは、わらべうたの種をまき、子ども達と共に大きく豊かにわらべうたを育てていくことのできる保育者の存在である。保育におけるわらべうたあそびが、子どもの育ちや学びにとって、意義ある活動であることは、多くの研究で明らかになっている。では、保育士は、わらべうたを用いる保育について、どのように捉えているのであろうか。

宇部市では近年、保育士の年齢構成が偏り、先輩保育士と共に保育を行いながら、自然と身に付けていた保育内容が継承されなくなっていることに危機感を感じ、専門領域別研修として令和元年度から「保育士も子どもも楽しむわらべうた」をテーマとして、わらべうたに取り組んできた。筆者は5年間にわたり講師を務め、わらべうたあそびを演習形式で学ぶ実技研修と、園での実践記録を基に振り返りを行う理論研修とを計13回実施した。本研究では、保育士が取り組んだわらべうたの実践記録から、子どもにとってのわらべうたの意義だけでなく、保育士の専門的知識・技能の高まりや、わらべうたに取り組む意識の変化について明らかにしたい。また、保育者へのアンケートから、わらべうたを保育に用いる有用性を探りたい。

1. 「研修部会 わらべうた」の取り組み

宇部市のわらべうたへの取り組みは、まず公立保育園の保育士が中心となり「研修部会 わらべうた」を立ち上げ、各月ごとに実践するわらべうたを決めるなど年間計画を立て進められた。2回の実技研修の後、部会の保育士が園で実践した際のエピソードから、子どもの様子や保育者の援助について、次への活動に活かせるよう、成果や改善点、留意点等を筆者がコメントした。以下は、その際の各年齢ごとのエピソード記録をもとに、筆者のコメントをまとめたものである。

1) 0.1歳児クラスのエピソード記録より

午後のおやつ後の自由あそび中、高月齢児（8～11か月）の6人がマットに座っていたので、『ちょちちょちあわわ』を歌ってあそんでみせると、保育者の動作や表情をじっと笑顔で見ている。2回、3回と繰り返すうちに、歌声にタイミングは合わないものの、まねるように手をたたき合

わせる動作をし始めた。「上手！上手！」と褒めると笑顔になり、一緒に喜び合うことができたと感じた。保育者の膝に同じ方向を向いて座らせ、子どもの手を取り一緒に動かして遊ぶと、「かいぐりかいぐり～」の時には少し嫌そうに腕に力が入り抵抗を示したが、終わると「上手！上手！」の保育者の声に合わせて拍手して笑顔を見せていた。また、嫌がることもないが表情の変化や動きが見られない園児もいた。

低月齢児（3～6か月）は機嫌よく起きて寝転がっている時にかかわり、目を見ながらあそんで見せたり、「おつむてんてん」のときにポンポンと頭に触れたり、「ひじとんとん」でひじに触れてかかわったりと子どもの手を取り歌声に合わせて動かすと、時々笑ったり、「あーあー」と声を発して応えているようだった。

おやつ前、子どもたち（11か月～1歳4か月）が席に着いた際に、「ちょちょち～」と保育者が歌ってあそび始めると、4月入園の子はじっと見つめていたが、昨年からの在園児は保育者が歌い始めると、歌声に合わせて手をたたいたり、「あわわわわ～」と口元に手を持っていき声を出して楽しんだりする姿が見られた。歌が終わっても口や頭を手の平でポンポン押さえる姿がみられたので、「口があったね」「頭あったね」など、子どもが手で押さえる場所を言葉にして添えながら遊び、「上手じゃねー」と褒めると嬉しそうに手をたたいて喜ぶ姿に保育者も嬉しくなった。その後も、子どもからの「もう1回」の表情や動作でのサインを受け止めながら繰り返し楽しむことができた。

また、食後におしぼりで口元を拭く際、保育者が「あーわーわーわー」と言いながら口元をタッピングして拭くと子どもも面白がって「あーー」とタイミングを合わせて発声し「あわわわわわ～」の響きを楽しむようになった。

そのやりとりの繰り返しもあったためか、先月は見ているだけだった高月齢児のAも、『ちょちょちあわわ』の歌が聞こえると、「あわわわわ～」と口元に手を当てて自分の声を面白がり、Bはその楽しむ姿を喜ぶ保育者を見て、笑顔になり「あわわわわ～」と繰り返し楽しむ時間が過ごせた。また、「ちょちょち」のフレーズがきこえ始めると、どこにいても手をたたき合わせて楽しそうにする他児の姿も見られた。

【保育士の考察】

日頃の生活の中で、何気なくうたってあそんでいることが日々の経験の積み重ねにもなり、「ちょちょち」とうたいはじめると、“何だろう”と保育者のほうを向いたり、顔や様子を見つめたり、声を発したりと様々な子どもの反応を感じることができた。また、動作を模倣する姿も見られ、成長を発見するきっかけとなった。保育者や高月齢児が様々な刺激となり、低月齢児も視覚や聴覚が刺激され、声を発したり笑顔になったりと反応につながったと考えられる。わらべうたであそんだことが、やりとりのきっかけとなり、子どもが喜び楽しむ姿を目にすることで、保育者も楽しく嬉しくなり、またその喜ぶ保育者を見た子が笑顔になるなど、気持ちを共感し合うことができたことで、クラス全体の雰囲気明るくなり、次はどんなことをしようかなと保育者自身も意欲や期待を持ち、モチベーションアップにつながった。

以上のエピソードや保育士の考察からは、保育士が子どもの体のわずかな力の変化や反応を感じ取っており、一对一の触れ合い遊びの効果が感じられる。表情が変わらない子や動きとしては反応が現れていない子どもの場合も、内面では感じ取っている可能性もあり、継続的に活動し、その子なりの変化に気づいていくことが大切であろう。

『ちょちょちあわわ』は、見る・聴く・感じる（触覚）といった、感覚への複合的な刺激によって、感覚の発達を促すと考えられ、対象児の発達段階にふさわしい題材といえる。保育士が、子どもの笑顔や笑い声、応答の声などから情動を感じ取り、それに応えることで、社会性の基本で

ある人への信頼感が生まれると考える。

11 か月～1歳4か月の子どもでは、食後の口元を拭くエピソードから、生活の中の様々な行動にもわらべうたを用いていることがうかがえる。日本語の高低アクセントはそのまま節になりやすく、名前を呼びかけたり、声掛けをしたりするときに、自然と二音になっている経験は誰しもあるだろう。生活の中での何気ない語りかけや歌いかけが、聴くことを通しての音楽経験を積むことにつながる。それまであまり反応がなかったA児が見せたしぐさや声が、保育者の快の情動を引き起こし、それを見たB児も笑顔になり、楽しい活動が保育士を介して徐々に広がっていることがうかがえる。一対一のわらべうたあそびは、眼差しを交わすことで、言葉にできない気持ちや表現をやり取りすることができる。子どもの自然な表現を見逃さず、子ども達だけでなく、保育者もわらべうたを通して気持ちが前向きになったと気づくことができている。A児の変化からは、わらべうたは自分で歌えなくても、楽しい経験と共に音楽が記憶となって、子どもの中に蓄積されていることが分かる。何より、わらべうたあそびを通して快の情動の共有がクラスの雰囲気を明るくし、そのことが保育者の保育（わらべうたの実践）へのモチベーションを高めており、保育士自身がそのことに気づいていることが大変意義深い。

2) 2歳児クラスのエピソード記録より

保育士がマットの前に座り、『さるのこしかけ』を歌い始めると、子どもたちがマットに座りながら、一緒に口ずさむ。子どもたちが集まり、座ったところで、保育士が両手でオーガンジーを丸めて握り、手を上下に振りながら、『にぎりぱっちり』を歌う。「びよびよびよ」のところで、オーガンジーを少しずつ手から出していく。子どもたちは、オーガンジーがフワフワと出てくることを喜び、見ている。「みんなも一緒にやってみよう」と声をかけ、子どもたち一人ひとりにオーガンジーを渡す。すぐに子どもたちは、保育士の真似をして両手でオーガンジーを握っていた。それぞれ握った手を上下に揺らすことで、子どもたちなりに拍を感じながら、『にぎりぱっちり』を歌い、自分の手からオーガンジーがフワフワと出てくることを喜ぶ。オーガンジーを握ることに集中している子もいたが、実際に自分でオーガンジーに触れることを楽しんでいる様子だった。

次に、日ごろから、保育士が行うのを見ている、『おてぶしてぶし』を、保育士が両手でオーガンジーを握って上下に振り、歌う。「いや」で片方の手にオーガンジーを隠し、どちらに入っているか、子どもたちに尋ねる。「こっち！」と自分の思うほうの手を指す子もいる。子どもたちも一緒にオーガンジーを握って、『おてぶしてぶし』を歌う。

続いて、保育士が手拍子をしながらか、拍に合わせて歩くと、子どもたちも一緒に手拍子をしながらか、自由に歩く。「いや」で同時に止まるように声をかける。両手をにぎったまま歩く子、「いや」でピタッと止まれる子、タイミングよく止まれない子、と様々だったが、何回か行ううちに、拍に合わせて止まれるようになってきた。手をグーにして止まったら、「次は手をパーにしてみる？」と子どもたちから提案があり、子どもたちがアレンジして楽しむ姿が見られた。その後、廊下を歩くときなど、歌いながら歩くと、拍に合わせて歩くことで、落ち着いて移動ができた。

【保育士の考察】

遊びの場面はもちろん、活動の切り替えや移動時など、生活のあらゆる場面でわらべうたに触れる機会を取り入れられるということが、実践により経験できた。今後も、生活の中のあらゆる場面で、子どもたちの好きな歌を歌っていきたいと思った。子どもたちのアイデアも取り入れて遊びを発展していく楽しさも味わうことができた。また、いつもの遊び方だけではなく、動きをつけることで、見ている時とは違う、また新しい楽しさをみつけることができることを体験することができた。

人は、話す言葉よりも歌の方に注意を向ける特性が生まれながらにあるという。保育の中で動作を促したり、約束事をしたり、活動を切り替えたりするときにわらべうたを用いることは、今回「さるのこしかけ」の実践を通して保育士が「子どもたちの好きな歌を歌っていきたい」とあるように、指示ではなく音楽を介した保育につながると考える。

『にぎりぱっちり』ではオーガンジーを用い、保育士の手から現れるオーガンジーの美しい色（視覚）だけでなく、自分の手を通して感じたオーガンジーのさわり心地（触覚）を楽しんでいる子どもの様子に保育士が気づいている。人は生まれて様々な感覚器官に刺激を受け、それらを総合的に知覚・感受しながら発達してゆく。遊び方に捕らわれず、子どもの姿から、子どもの育ちや学びを受けとめている保育士の姿が見られた。次の『おてぶしてぶし』は、手の中に隠したものを当てる遊びであるが、まだ手の小さい2歳児にオーガンジーを握り込み、隠すことはむづかしいと感じたのか、保育士が手を打ちながら拍に合わせて歩く活動へと変化させた。本来の遊び方（両手を片手ずつに離す）「いや！」のタイミングを、歩みを止めるタイミングに用い、全身をコントロールすることを楽しむよう工夫されている。子どもたちの楽しいという心情が、「止まるときの手の形を変える」というアイデア（意欲）を生み、みんなで楽しもうという態度になって表れている。歩くことが楽しい2歳児の発達段階を活動に取り入れた保育士の視点は、わらべうたを何通りにも遊ぶことの可能性を示している。「新しい楽しさを見つけることができた」のは、保育士と子ども双方にいえることであろう。

3) 3歳児クラスのエピソード記録より

日々の設定保育時や読み聞かせの前に、『たけのこめだした』を歌い、繰り返し親しんでいる。初めて聞く歌に、子どもたちは保育者の口や手の動きを見て真似をして口ずさむ程度である。

ある日、子どもたちが園内に小さな竹が生えているのを発見した。そこで、保育者がわらべうたを歌い始めると子どもたちも一緒になって歌い楽しんだ。そして、保育者が実際にその竹をハサミで切って見せ、切り終わったところで、「えっさ、えっさ、えっさっさ」と唱えた。食い入るように見ていた子どもたちも保育者の唱えに反応してたちまち笑い始め、一緒に「えっさ、えっさ、えっさっさ」と何度も唱えて楽しんだ。また、全介助のAくんもこの節が気に入り、体全体で喜んでる姿に子どもたちも気づいていた。

誕生会では、全児に竹を見せながら先日の出来事を伝え、このたけのこが歌詞になっているわらべうたが『たけのこめだした』であることを説明した。子どもたちは、園庭にたけのこが生えていたことや節の面白さに興味を示し、みんなで一緒に楽しんだ。その後も子どもたちが口ずさみ、楽しむ様子がみられた。

【保育士の考察】

実際に竹を見たことや、馴染みやすいリズムやフレーズを気に入ったことで、誕生会をきっかけに子どもたちから自然に口ずさむことが多くなった。また、障がい児A君との関わりのなかで、「えっさ、えっさ、えっさっさ」の部分でよく笑い楽しそうにする姿に、クラスの子どもたちが何度も唱えてAくんと一緒に笑い、その楽しさを共有するようになった。Aくんと関わりを見出すのが困難な中で、わらべうたを通じて、自然にかかわり心通わせることができた。

わらべうたの題材は、季節やそれによって変化する自然や人々の生活に根差したものが多い。このクラスも、5月という季節ならではの竹の芽生えをわらべうたで遊んでいる。クラスの保育で見つけた竹をきっかけにわらべうたが始まり、誕生日会という園全体の行事によってみんなが共有している。たとえ、竹を切らなくても、また次の日に竹を見ながら歌うことが楽しみとなる。「えっさ、えっさ、えっさっさ」の掛け声とともに、日々の竹の成長を見守るというあそびの継

続にもなろう。身の回りの自然への興味関心を広げる活動である。

また、このわらべうたの特徴として、オノマトペが持つ音とリズムの楽しさがある。

たけのこめだした 花咲きゃ開いた ハサミでちょん切るぞ えっさ えっさ えっさっさ
--

俳句や短歌等に見られる七五調は、日本語のリズムとして古くから用いられている音律である。強弱アクセントのない日本語では、文字数によってフレーズにリズム感を生み出している。『たけのこめだした』は、1フレーズが八文字だが、第六・七文字を一拍として七拍目で唱える。八拍めの空白が息継ぎとなり、みんなで息を合わせる役目を果たしている。「えっさ、えっさ、えっさっさ」は促音と共に、sの子音を発音することで、音に勢いが生まれ、タイミングも合わせやすい。支援が必要な子どもも、音そのものの楽しさに感情が動き、クラスの子ども達みんなでその楽しさを共有している様子が記録されている。わらべうたには「どんぶかっか、つかっか」や「どっちんかっちん」など、言葉を音として楽しむ楽しいオノマトペが豊富である。

4) 4歳児クラスのエピソード記録より

自由遊びの時、女兒2人(RとY)がレゴブロックで遊んでいた。城や家を作っている。Rがブロックを握り「おてぶし てぶし～」と歌い始める。そばにいた保育士とYも一緒に歌う。Rが「どーっちだ。」と保育士に聞く。「うーん。どっちかなあ。こっち？」と保育士が右手を指さすと、手の平を見せて「ざんねーん。こっちでしたー。」とうれしそうに言う。「Yもする。」と言い、今度はRとYの2人がブロックを握り「おてぶし てぶし・・・」と歌いはじめる。RとY「どーっちだ。」とにこにこして言い、保育士の反応を期待して待っている。「こっちかなあ。やっぱりこっちにしようかなあ。」と保育士が言うと、2人で顔を見合わせて笑っている。

その様子を見ていたMとKが「よして。」と言う。Y「いいよ。一緒にしよう。」「先生、目をつぶってね。」とRが言い、4人がレゴブロックを握っている。K「もう、目を開けていいよ。」「せーの。おてぶし てぶし～」と歌いはじめる。「どーっちだ。」と聞く。「こっちかなあ。」「こっち？」などとそれぞれに答え、「あたりー。」「ざんねーん。」などと答える。

4人がひそひそと内緒話をはじめ、保育士の方を見て笑っている。K「先生、目をつぶってね。見たらだめよ。」M「目を開けていいよ。」「おてぶし てぶし～」と歌いはじめる。「どーっちだ。」「こっち？」とそれぞれに答えると「ざんねーん。」「ざんねーん。」と、両手とも空っぽの手の平を見せる。「先生、だまされたー。」と言い喜んでいる。

【保育士の考察】

『おてぶし てぶし』は、昨年度から繰り返し歌ってきたわらべうたである。歌に合わせて自然と体や手を左右に動かす姿が見られ、「へびのなまやけ」「かえるのさしみ」など歌詞のおもしろさもある。自由遊びの時に、自然と口ずさんでいる場面も見られた。今回の事例は、ブロック遊びの過程から自然発生した事例である。友達と保育士のやりとりを見て「おもしろそうだな。」と心が動かされ、輪が広がる。さらには、「手の中に何も握らず歌う」ということを思いつき、保育士の反応を期待して待つ姿も見られた。保育で取り入れたわらべうたを子どもたちが自然発生的に楽しんでいた。わらべうたが自然と生活にとけこみ、わらべうたの楽しさを子どもと保育士とが共有していた。

この事例からは、ブロックあそびの際、手のひらに握りこめる大きさのブロックに、『おてぶしてぶし』が誘発され、わらべうたあそびへと展開していることがわかる。環境(道具)とこれ

までの経験を結び付け、次の遊びへ発想が広がっているといえるだろう。また、一部の子どもから周りの子どもにも徐々に遊びの輪が広がり、保育士ともやり取りを十分に楽しんでいる様子が見えてくる。歌詞には意味のない言葉遊びや、古くて難しい言葉なども含まれているが、繰り返し遊び言葉を発することは、言葉の音遊びそのものであり、豊かな日本語に触れる機会として、幼児期には有意義である。遊びの後半には、本来のルールを変えて、何も握らないことを子どもが思いついており、相手の予想を先読みしたり相手の予想を裏切ったりする、年中児の思考力の発達がよく表れている。

5) 5歳児クラスのエピソード記録より

保育者がロッカーの前に座る子ども達に向けて、『おふねがぎっちらこ』のわらべうたを紹介する。保育者が、1人の子とペアを組み、歌いながらお手本を見せる。その際、拍を意識しながら歌い、どのタイミングで相手を引き寄せるか、分かりやすくゆっくりと動く様子を見せる。その後、広がって2人組になるよう伝え、ぶつからないよう間隔を空けて座らせる。相手を探せない子には、一緒に相手を探したり、保育者が相手になったりして対応する。

今回は新型コロナ対策として、お互いが直接手を握らず、ラップの芯を持つ方法を取る。ラップの芯にお互いが内側、外側で持つ位置を色分けで印をつけ、握るようにする。足は、お互いが少し広げて足の裏を合わせるようにして座らせる。準備ができたところで、子ども達が動きやすい速さで歌ってみる。身体の大きさや柔軟性の差で相手が痛くならないよう配慮しながら手を引くことを伝える。

子ども達は、拍を意識して歌い、引き寄せるタイミングを確認しながら楽しんでいる様子が伺えた。慣れてきた頃に、「次はどんな船にのってみようか？」等声をかけ、子ども達自身がイメージやテンポを変えてみる案を考えてみられるよう促してみる。すると、小さい船の場合は、急いだイメージで速いテンポで、大きい船の場合は、のんびりのイメージで、ゆっくりのテンポでやってみる様子が見られた。ある程度繰り返し楽しんだら、ペアを変える。変える際には、体の大きさや、力の強さ等を考慮して、ペアによっては保育者が調整する。

【保育士の考察】

この事例では、わらべうたのテンポや強弱の変化に対し、子ども達だけで次第に上手に調節し、さらに拍を持つことやその雰囲気の意味を、5歳児程度になると感じることができ、楽しめるようになることが分かる。最初の保育者のお手本に対して、まずは忠実に再現した体験を楽しんでから、自分たちなりの楽しみ方をイメージし、発展させていくことができる過程が見てとれる。次に、最初の2人組での体験を繰り返した後、ペアを変えても継続して、またはより発展させて楽しむといった、5歳児という年齢の発達に応じた行動も見ることが出来る。最終的には、一つの目的に向かって連帯感が生まれ、達成感や集団で行う楽しさを共有するところまで到達する。

このエピソードからは、手をつなぐ代わりに、ラップの芯を用いるという保育士独自の工夫がみられた。コロナ感染予防対策としての面だけでなく、ラップの芯を船のオールに見立てることで、子どもたちのイメージが広がり、活動が活性化されたと考えられる。事例では、保育者が芯に手の位置を示していたが、あえて示さず、どうしたら漕ぎやすいのかを、子ども自身が友達と試行錯誤しながら工夫することも、遊びを通じた年長児の主体的・対話的で深い学びにつながると考える。研修会では、1曲を何通りにも遊ぶことができるのがわらべうたの特徴であると伝えてきた。5歳児クラスの保育士の考察からは、同じわらべうたでも子どもの発達段階に応じて遊び方を変化させることで、楽しさや子どもの中に育まれるものが変わることを、体験を通して理解していることがわかる。

2. 実践記録の振り返り研修から

第1章で述べたように、各年齢のエピソード記録に筆者がコメントしたものを、研修部会の振り返り研修会で共有した。これらの取り組みを、令和4年度からは公立私立を問わず、市内の認可保育園に広げ、年に2回の実技研修の他、各園でとられた日誌形式の実践記録を基に、振り返り研修を2回行った。0歳から5歳まで計180日余りのわらべうた実践記録から、年齢ごとに印象的な子どもの姿と保育者の援助を取り上げ、子どもの育ちや発達との関係がよく捉えられている点や、わらべうたあそびの特徴を活かした援助や今後の改善点について筆者がコメントした。1回目はコロナ禍が収束しておらずオンライン研修であったが、2回目は対面で実施することができた。図1は振り返り研修1回目の1歳児のスライドの一部である。

実践日	わらべうた	子どもの姿と保育者の援助	考察のポイント
4/20	いっばんばし どうきょうと	・「もう一回」と求める子どものしぐさを感じ取り、優しい口調で応じるようにする。 ・好きな部位があれば、好きなどころから始める。	・すぐぐったい感覚は、他者との関りで初めて感じるものです。やり取りの中で期待を持って待つようになります。 ・子どもをしっかり見ているところがいいですね。
6/25	ちよちよち はちはち じーじーばー	順番を楽しみに待ったり、他児の姿を見て楽しんでた。	給食配膳待ちの時間で、椅子に腰かけて並んだ状態で、見渡せる隊形が効果的なケースです。
7/26	うまはとしとし ちよちよち	一対一で楽しんだり、数人とで行う等、子どもの思いにこたえながら行った。	個性によって楽しみ方はさまざまなことを認めています。
8/18	おてぶしてぶし ぼうずばうず	子どもに見えるようにブロックを交互に隔し… 子どもと目を合わせ、スキンシップを回った後、わらべうたを始める。	発達に合わせて、遊びをアレンジしています。 「一緒に楽しい遊びをしようね」の準備ができています。
9/22		・楽しみに待つようになってきた。	・待ってもやってほしい気持ち。
10/22	おやゆびねおれ こはとうちゃんにん どころ	友達が触れ合い遊びをしている姿をみつけ、真似をしてそばで寝転ぶ。	友達の遊びを見て、自然に集まって遊びが広がっていくのが、わらべうたあそびの理想的な姿です。
11/22	おふねがぎっちらこ	保育者の足を触って、自分もやってほしいと要求してくる。	
12/13	かれっこやいて	・「かれっこ」を「もちっこ」に替えて、季節を感じられるようにする。 ・給食準備中に、子どもたちが机をトントン叩いて遊んでいる姿から、わらべうたに発展させた。	・環境を通して遊びながら学ぶ子どもたちにとって、季節を感じることはとても大切です。 ・子どもの何気ない動きや姿を見取り、即座にわらべうた遊びにつなげられる応用力が素晴らしいですね。

図1 1歳児の記録から (2022.2.25 オンライン研修 一部抜粋)

0歳児から5歳児までの実践記録を通して、保育にわらべうたを用いた際の保育士の気づきが大きく3つに集約された。それぞれについて、以下に述べていく。

1) 子どもの発達との関連について

わらべうたと子どもの発達との関係については、永田(2002)による「身体的発達、言語の発達、社会性の発達、心の発達」、小島(2010)による「身体的発達、知的発達、言語的発達、情緒的発達、美的発達、論理・社会的発達」、野口(2017)の「方向感覚、数学的認知能力、社会性、道徳性、運動機能」など、多くの研究がなされてきた。筆者は研修会を通して、わらべうたあそびが子どもの成長・発達にとって、「感覚、運動能力、言葉、社会性」の発達の面で、意義ある活動であることを伝えてきた。

【感覚の発達】

- ・わらべうたを通して、様々な声や音、音楽的な音程やリズムを聴き、次第に聞き分けるようになる。
- ・歌いかける人の表情や口元、動きを見る。
- ・触れ合って遊ぶことで他者や事物を知る。
- ・遊びを通して、身体の揺れを体験する。

【運動能力の発達】

- ・あそびを通して、歩く、スキップする、ジャンプする、屈伸する等、身体の使い方やコントロールの仕方を知る。
- ・歌うための、発声器官や呼吸器官の使い方や調整方法を知る。

・握る、開く、指を立てる等の手や指先の細かい動き、手と身体または物との協応、左右の手を組み合わせさせた使い方を体験する。

【言葉の発達】

- ・大人の歌いかけを見たり聴いたりして、発音を視覚的、聴覚的に知る。
- ・オノマトペ等、言葉を音として楽しむ。
- ・身体の部分や食べ物など、楽しみながら身近な言葉に親しむ。
- ・数えることや数字について知る。

【社会性の発達】

- ・大人とのわらべうたあそびを通した1対1の関わりで、安心感を持ち、人への信頼の基礎となる愛着が形成される。
- ・わらべうたあそびを通して、楽しさや喜びを共有し他者と共感する心が育まれる。
- ・大人や友達と一緒に歌い、遊ぶことで、コミュニケーション能力が高まる。
- ・ルールを理解し、役割を果たすなど、道徳性・協調性・自己をコントロールする力等が養われる。
(『楽しくうたあそび123』(2022)(ミネルヴァ書房)より)

今回の実践記録の保育士の気づきで最も多かったのは、子どもたちの社会性の発達についてであった。『いっぽんばし』では、ちょちょよされることを期待している様子や、1歳児の『へびごっこ』では、つながって歩く姿を保育士に誇らしげに手を振って見せたり等、社会性の基礎となる他者(保育者)との情意のやり取りが多く挙げられていた。

また、1歳児の『うちのうらのくろねこが』では、子ども達のリクエストで、動物を変えて遊んだり、5歳児達が自由遊びの時間に『なかなかほい』がしたいと訴えたり、0歳児でも、保育者のエプロンのポケットからハンカチを出して『いないいないばあ』をしてほしいと促すなど、自主的にやってほしいと意思表示する姿を捉えた記述も多かった。

『とおりゃんせ』で、友だちの手を取って活動に引き入れる2歳児や、友だちに『じーじーばー』をやってあげようとする1歳児など、わらべうたあそびを通して、他者と積極的にコミュニケーションをとろうとする姿が見られた。また2歳児の『きーりすちゃん』では虫役になる順番を、楽しみに歌いながら待ったり、4歳児の『はないちもんめ』や5歳児の『だるまさんがころんだ』では、お互いの主張に折り合いをつけられるようになったり、オニ役になれずすぐにやめたが、再度「よして」と戻ってくる等、自己の感情をコントロールする姿も見られた。

また、異年齢児との関わりも多いわらべうたあそびでは、年少児を遊びに引き入れ、意見を聞いたり、できずに泣いている子にできるよう教えたり、友だちを応援したり等、5歳児では他者を励ます姿が見られた。逆に、誰かが失敗してもみんなで笑い合い、次への挑戦に気持ちを切り替えるなど、他者を許容する姿も5歳児ならではの姿であろう。『なかなかほい』では、子どもたち同士が、もっと速くすることに挑戦し、できるまで何度も取り組んだり難しさも共有しながら、一方では上手な子の観察をしたり、向上心をもって遊びに取り組むことも多く挙げられていた。

集団のわらべうたあそびは、ルールがあるものも多い。2歳児の『きーりすちゃん』では、まだ虫役になっていない子を選んで役を回したり、3歳児が友達とおもちゃの取り合いで『げんこつやまのたぬきさん』を使って順番を決めたり、『こんこんちきち』では、子ども同士で「はしらないよ」と声をかけ合ったりなど、規範意識の芽生えが見られた。

以上のように、わらべうたあそびによって楽しさを共有し、他者と情意を交わすことや、自主性やコミュニケーション、自己の感情コントロール、他者を励まし許容する心、向上心、規範意識等、社会性の発達との関連が多く読み取れた。

2) わらべうたを楽しむ工夫

実践記録には、より楽しい活動になるように、本来のあそび方にアレンジを加えた様々なアイデアが見られた。

まず一つ目は、言葉のアレンジである。『うちのうらのくろねこが』では、「こんにちは」を別のあいさつに変えて遊んでいた。わらべうたは、生活に根ざした題材が多く、歌詞にあいさつが含まれているものも多い。あいさつは知識というより、日々の体験を通して身につくものである。わらべうたあそびは、場面によってあいさつが変わることを自然に体験でき、繰り返しあそぶことで、子どもの中に定着する良さがあると考えられる。また、『どんどんばしわたれ』では、イメージしやすい動物の名前を問いかけ、取り入れていた。動物は子どもにとって、絵本や表現活動でもなじみのある存在であり、保育士が提案するだけでなく子どもからのリクエストを活かし活動することは、イメージ豊かに展開する工夫として有効であろう。このように、言葉のアレンジを用いることは子ども達のイメージを広げるだけでなく、言葉への興味付けや各発達段階における言語習得につながるのではないかと考える。

二つ目は動きのアレンジである。『おすわりやす』では「こけまっせ」の後、横に倒す、足の間に落とす、上に抱え上げる等「こける」動きにバリエーションを持たせていた。『いっぽんばしこちょこちょ』では、くすぐる部位を変え、『さるのこしかけ』では床に落ちるタイミングを変えていた。0.1歳児は、感覚器官や運動能力の発達が著しい時期である。触れ合いあそびの中で、触れられる部位が変わることは、新たな感覚を刺激することになる。また、くすぐったさは、他者の存在があって初めて成り立つ感覚であり、くすぐり遊びは触覚を用いた早期のコミュニケーション遊びといえる。揺れを伴うあそびは子どもの平衡感覚に刺激を与えられ考えられる。左右に傾いたり、上がったたり下がったりと多方向に体が傾くことは、平衡感覚への豊かな刺激になる。また、そのタイミングをずらすことは、次の動きが予測できず、期待感や意外性があそびを高揚させ、何回もしたいという意欲にもつながる。繰り返す際の新たな仕掛けとして動きのアレンジは大変有効である。現在、動画サイトには、わらべうたも数多く投稿されており、『なかなかほい』も、二人組で手を取るあそび、向き合って両手で顔を隠したり出したりするあそび、ステップのように足を使うあそび等、異なるあそび方が多数紹介されている。1曲を何通りにも遊べるのがわらべうたの特徴でもあり、あそび方のレパートリーが広いほど、保育者の強みになるともいえるが、保育園等で遊ぶ場合は、まず、共通のあそび方を共有し、その後、動きのパターンを変え等バリエーションを増やしていくことが望ましい。

三つ目は、遊び方のアレンジである。『いっぴきちゅー』で、ネズミのお面をかぶり遊んでいる記録があった。道具を何かに見立てて遊ぶことは、子どもの想像力を育む助けとなる。ごっこあそびが盛んになる2歳児では、自分で制作したネズミのお面をかぶることでネズミになりきることができ、わらべうたを遊ぶことが表現活動にも繋がっている。また、『げんこつやまのためきさん』のジャンケンを勝ち抜き対戦方式にしたり、『どんどんばしわたれ』で様々な橋(障害物)を用意したり等、単純なあそびに対戦ルールを加えたり、超えるべき障害物を取り入れることで、挑戦する心や成就感を味わえる楽しさが生まれている。

また『いもむしごろごろ』に『貨物列車』の遊び方の要素を入れる、『ことろ』の歌を『でんでらりゅうば』に置き換える等、複数の遊びを組み合わせるアイデアも、年中・年長児クラスで見られた。今回は保育者の発想であったが、今後子ども達が遊びを組み合わせ、応用することへの促しにもなると考える。

3) 保育者の役割

(1) 子どもの変化を捉える視点

3歳未満児クラスでは、わらべうたの中でも特に触れ合いあそびで、子どもの表情や声、動きから気持ちを読み取る記述が多く見られた。「次第に期待感を持った目で持ち上げられるのを待っている」「繰り返し遊ぶが、まだ物足りなさそうで・・・」「いろいろな方法で心を寄せている子にも～」等、まだうまく話せない子ども達の表情や態度から、その心情をくみ取っている。

「他の遊びをしながら、様々なわらべうたを口ずさむ子もおり～」[子ども発信で大好きな歌に親しみ、それが他の子どもに伝わって楽しむ姿にとっても感動した]と、日頃から子どもたちの姿をわらべうた実践と関連付けながら観察し、楽しさを子どもたち同士で共有している姿を捉えている。中には「[1回もじゃんけんしていない!]と怒りながら砂場に戻った子が、「あのこがほしい」と歌いながら満足そうに穴を掘っている」といったように、ひとり一人の言動を丁寧に観察し、子どもの気持ちの複雑な揺らぎを捉え、認め、わらべうたが心に残っている姿を見つけ出している。無藤(2021)は、保育はマニュアル通りではなく、子どもの姿を捉え、理解し、それに基づいて環境を整え、直接・間接の関りを通して子どもを育てることにこそ、保育者の専門性があると述べている。保育の第一歩は子どもの姿を捉えることにあるといえる。

(2) 指導上の留意点

「リズムの変化が分かるように、丁寧に拍を取る」「場面や雰囲気合った歌い方に気づいた」「詳しく知らなかったのでSNSで調べた～いろいろな機会を作ることのできる歌だと感じた」等、自らの音楽的技能の必要性に気づき、教材研究にもつなげた保育士も見られた。

「自由遊び中や集まりの前など、自然な流れでわらべうたをすることが増え～」[一斉保育の中で、わらべうたを始めてしまうことに気づき、安心感や信頼感が築いていけるよう、何気ない日常の対一のふれあいの中で、わらべうたを大切にしていこうと感じた]といった、わらべうたあそびの取り入れ方についての記述も多く見られた。わらべうたは本来、自然発生的に二人や少人数で始まり、次第に集団へと広がるのが望ましいといわれている。保育の中でわらべうたを取り入れるには、保育者からの提案だけでなく、子ども達の遊びや動き、環境をきっかけとして、様々な場面で子どもたちとわらべうたを共有する機会を増やすことであろう。「[列あそびから二人遊びへと進む]遊ぶ順番が逆だったらよかったと思った」「モグラ役が全員に回るよう、モグラ役をした子を把握しておく」等、展開の順次制への気付きや公平性への配慮もうかがえた。

「本来の遊び方と違って、子どもたちが自由に楽しむ様子を受け入れ、見守ることも大切だと思った」「それは楽しみ方を発展させたかたちにも見えた」と、子どもたちなりの楽しみ方を受け止め、認め、見守る大切さに気付いている。

一方で、「友達と役割を交代しながら遊ぶ楽しさを感じられるよう、仲立ちをしていく」「勝敗によるトラブルが多いので～和やかに遊べるように仲立ちをしていく」といったように、仲立ちという言葉も多く見られた。先ほどの見守りと同様、指導ではなく、遊びの主体は子ども達であり仲立ちによって遊びが滞りなく進むことが、保育者の役割であると気づいている。

3. 保育士アンケートより

わらべうたに取り組んで4年目の令和4年2月に、研修部会では公立保育士68名を対象に、保育における継続的なわらべうたの取り組みについてアンケート(自由記述)調査を行った。わらべうた研修やわらべうたを用いた保育の実践を、保育士自身がどのように感じているのか考察した。

1) 記録の重要性

今回、わらべうたに取り組むきっかけは、世代間の伝承が難しくなったわらべうたを、研修を

通して身に付け、保育士の技能向上を図ることであった。さらに、テーマである「子どもも保育士も楽しむわらべうた」について検証をするために実践記録を取り、研修会で情報共有し、考察を深めるようになった。アンケートでは、「記録を残そうと思うとどうしても身構えてしまい、用意したものをやったり、させる形になったりすることが多かったと反省した」「秋～冬は行事も多く月1の記録は大変だった」など、多忙な保育の中で新たな取り組みとして記録を取る大変さが見られた。しかし、「客観的に見ることができ、改善するヒントになった」「記録したことで、子どもたちの姿（成長）をとらえることもできた」「記録を取ることで、子ども一人ひとりの表情ややり取りを気にするようになった」等、記録することで自分の保育を見直す機会となっている。また、振り返りの研修会を受けたことで、「他の職員の記録を見ることで、アレンジや取り組み方など勉強になった」「他者の記録から、子どもたちのつぶやきやしぐさを見逃さず遊びに取り組んでいる様子が、感じ取れた」「実践記録の考察を年齢別にとても詳しく説明して下さったので、理解しやすく勉強になった」等、他者の記録から刺激を受け、研修会でのコメントを参考に自分の改善点を見出すなど、次の実践への意欲につながったと感じていた。

2) 専門的知識・技能の習得

研修の大きな目的は「保育士の専門的技能（わらべうたあそび）の向上とわらべうたの伝承」であった。「意識的に取り組んだので、レパートリーが増えた。自分も、子どもたちもわらべうたを口ずさむことが増えた」からは、今回の取り組みの成果がうかがえる。わらべうたの特徴として、「1曲を何通りにもあそぶ」ことを研修でも伝えてきた。多くのわらべうたを知ることも大切だが、1曲を十分に楽しみ味わう方法を知ってほしいと思っている。「1つのわらべうたでも、各年齢に応じた遊び方があり、年齢ごとの活動のポイントや子どもとの関わり方など具体的に分かった」「1曲のわらべうたを色々なパターンで楽しむ事の大切さを知った」等、一つのわらべうたで子どもとのかかわり方が多様に広がる可能性を理解している。

本来わらべうたはあそびであり、子どもが自然と集まってきて膨らむ活動である。集団が基本である保育の場での取り入れ方について「自然発生的に始まる歌が増えるよう、歌い遊んでいきたい」「わらべうたがまだまだ自然に取り入れられていないと感じた」「改めて、わらべうたが自然発生的に伝承され続けていくことが大切だと思った」等、一斉活動の教材として指導するものではなく、子ども主体の遊びとして自然に取り入れることに気づきが多く見られた。

生活に根差した題材が多いのもわらべうたの特徴であり、「季節を感じたり、触れ合い遊びなど子ども同士の関わりを広げる場になった」とあるように、わらべうたを通して季節を感じることも、環境を通して学ぶ保育への再確認になっている。また、「保育士の歌声の心地よさなどを子どもたちはしっかり感じていることを知り、保育する中で意識して実践していきたい」では、子ども達がわらべうたを通して人の声の魅力を十分に味わうことを実感し、そのための専門的知識習得への意欲につながっている。小川・今川（2008）の言う「声は人間関係」のとおり、保育士が歌うように子どもも歌うようになることを踏まえれば、保育士自身が心地よく歌えることが子どもたちの歌声を引き出すカギとなるであろう。「リズムに合わせて子どもが動くのではなく、子どものテンポにわらべうたを合わせる事が大切」では、保育士の歌に合わせて子どもたちが動きをコントロールするのではなく、子ども達が無理なく遊び動くテンポこそが歌の速さであることに気づいている。ダルクローズのリトミック理論にあるように、音楽的要素の速度・強弱は動きの要素（空間）と非常に密接な関係にあり、どちらの要素も併せ持つわらべうたでは、あそびの主体は子どもであり、子どもの身体に合った動きや音楽であることが再認識された。

3) 保育の向上

「遊びに消極的な子の様子をよく見て理解し、少しの変化を見逃さず共有していくことの大切さが印象に残った」「一人ひとりがその子なりに関わっているという視点をもつ大切さを感じた」「わらべうたを日々の保育の中で活かす力(子どもを見る力)に繋がり必要性をあらためて感じた」といった、わらべうたあそびが、ひとり一人の子どもの姿を捉えるきっかけとなったという意見が多く見られた。「大きい年齢の子どもでは言葉のみで指示しがちだが、一緒に動いて伝える事はわらべうたに限らず様々な場面でも共通すると感じた」といったように、普段の保育について活かせる気づきもあった。なにより今回のテーマである「子どもも保育士も楽しむわらべうた」に込められた「楽しさ」について、「保育者が楽しむ事、どれだけイメージを保育者が広げていくことができるか…ということ」を前提に今後も取り組んでいきたい」「自然に運動機能を発達させていくなど様々な付随するものがあるがそこを目的とするのではなく、楽しくすることが大事にという事が印象に残った」「大人も動きに寄り添い、言葉をかけたり触れ合ったりして一緒に楽しむ事が大切ということ」など、多くの記述が見られた。子どもの様々な発達への刺激や効果を第一の目的とするのではなく、保育士自身が楽しみ子ども達とその楽しさを共有することが大切だと気づきが多かった。

4. おわりに

本研究では、「子どもも保育士も楽しむわらべうた」のテーマのもと始まった宇部市のわらべうた研修の内容や取り組みを概観し、保育士の専門的知識・技能の高まりやわらべうたに取り組む意識について明らかにし、わらべうたを保育に用いる有用性を探ることを目的とした。

5年間の取り組みの総括として、市では令和5年5月に最終アンケートを行った。(図2～4) わらべうたを楽しんでいる保育士は9割を超えた。保育士自身が変わったと感じた割合は64%にとどまったが、「保育者自身歌うことで穏やかな気持ちになった」「スキンシップが増えた」「わらべうたに誘いながら行動を切り替えるようにするなど保育に余裕が生まれた」など、保育への良い影響がみられた。

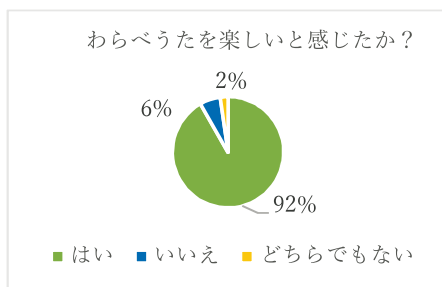


図2 アンケート1

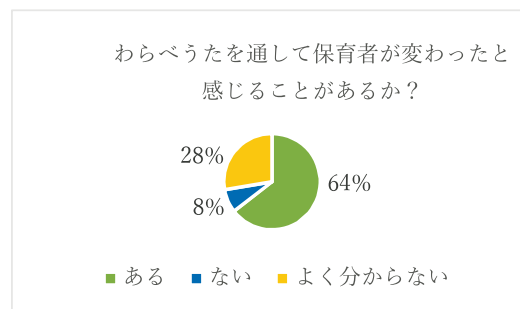


図3 アンケート2

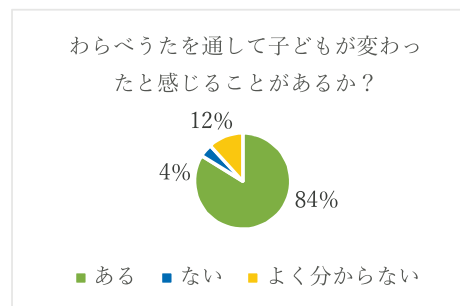


図4 アンケート3

一方、子どもが変わったと感じた割合は84%であり、「自由あそびの中でわらべうたが自然発生し、子ども同士のかかわりが増えた（広がった）」「普段消極的に見えていた子があそびの中で楽しそうにしていた」「いつも仲のよい子とばかりでなく、また、年齢に関係なく一緒に楽しんでいる」「集団あそびの機会が増え、集団の中で遊べなかった子が遊べるようになった」「自分だけでなく他児に向けた思いやりが育ってきた」など、わらべうたを通して子どもの姿の多面的な変化を捉えている。それだけでなく、保護者からも「家でも口ずさんだり、仕草を見せたり、兄弟に教えようとする姿が見られた」「家でも一緒にやってみたいから遊び方を教えてほしい」などの声が寄せられている。運動会、発表会、参観日などの行事やクラスだより、ドキュメンテーション、送迎時の会話などでわらべうたの取り組みを紹介したことが、家庭でのわらべうたを用いたコミュニケーションにつながり、保育園と家庭との連携の一助になっていると考えられる。

これまで見てきたように、わらべうたは発達段階に応じた多様な遊び方により、様々な発達への刺激となり、子どもたちの育ちに寄り添う活動であるといえる。また、それらを保育に取り入れることは、保育者の専門的技術の向上とわらべうたという文化財の伝承だけでなく、保育の第一歩である子どもの姿を捉える多面的な視点を持つことができる活動であり、その輪を家庭に広げる可能性を持っている。「わらべうたであそんだことが、やりとりのきっかけとなり、子どもが喜び楽しむ姿を目にすることで、保育者も楽しく嬉しくなり、またその喜ぶ保育者を見た子が笑顔になるなど、気持ちを共感し合うことができたことで、クラス全体の雰囲気明るくなり、次はどんなことをしようかなと保育者自身も意欲や期待を持ち、モチベーションアップにつながった」0.1歳児担当保育士のこの言葉は、わらべうたを保育に用いる原点を表していると感じた。わらべうたは、保育士の専門的技術の向上と共に、他者とコミュニケーションをとりながら快の情動を共有し、保育に用いることで様々な子どもの姿を捉えることができ、保育士の保育に対する意欲を引き出す可能性を持った文化財ではないだろうか。

謝辞

本論文の基となる、わらべうた研修会に参加いただいた宇部市内保育園の保育士の方々、また、アンケート結果等をご提供いただいた宇部市立保育園の「研修部会 わらべうた」の皆様にご心より感謝申し上げます。

参考・引用文献

- ・野口知英代「わらべうたあそびの教育的意義からの一考察－保育・教育課程と継承の関係性から－」『国際研究論叢』(2017) p 204
- ・小島律子『学校における「わらべうた」教育の再創造 理論と実践』黎明書房 p 14
- ・河北邦子 坂本久美子『幼稚園 保育園 家庭で 楽しく歌あそび123』ミネルヴァ書房 p 8～11
- ・無藤 隆「幼児教育と小学校教育の架け橋委員会」資料4-1 p 7
- ・『わらべうたと保育』コダーイ芸術教育研究所編
- ・小川洋子 今川恭子『音楽する子どもをつかまえない』(2008) ふくろう出版 p 170